

今！ 父母の時代の労苦を思う

神奈川県 岩元弘子

はじめに

中国東北部・遼東半島の最南端に位置する旅順は、山東半島と近距離で向き合っているため、昔から中国の中心部から朝鮮半島方面に旅する人々の中継地であり、交通の要衝であった。

明治三十七（一九〇四）年に始まった日露戦争では、旅順をめぐる山々に堅固な要塞を築いていたロシア軍と、これを占領して旅順港にいるロシア艦隊を攻撃したい日本軍との間で、四カ月余りの激しい戦闘があったが、明治三十八年一月の乃木將軍とステッセル將軍の水師營の会見、降伏文書の調印で、旅順の戦いは日本軍の勝利に終わった。この戦いにおける日本軍の死傷者は、六万人に近いと言われ、ロシア軍にも夥しい死傷者が出た。日露両国の若者の血汐が、中国の山野

を染めた。

日露戦争の結果、日本は関東州の租借権と南満州鉄道の長春以南の経営権をロシアから継承した。そして当時は民政の中心である関東州庁も、軍事の中心である関東軍司令部も、旅順に置かれた。

一 旅順への移住

私の祖父齋藤幸次郎は、旅順の戦いに一兵卒として参加したが、無事生還した。戦後関東州が日本の租借地となり、この地区の開発のために日本人の移住が奨励されているのを知って、旅順で商売をしようと思いつち、妻文と生まれたばかりの娘佐知子連れて、明治四十年十月に海を渡った。この娘が私の母である。

ロシア統治時代に建てられた西洋建築の立派な赤十字病院が日本の病院となっていたので、まずその中に酒保を開き、煙草、雑貨等を売るようになったが、数年のうちに斎藤商店という米穀、酒、味噌醬油等を商う店を旅順病院の前に開いた。二人は一生懸命に働き、日本人や中国人の店員を雇ってだんだん店を大きくしていった。

母は大正二（一九一三）年に小学校に入学し、卒業後旅順高等女学校に進み、大正十二年に卒業した。父名倉正二郎は、静岡県立浜松一中を卒業後、大陸で活躍することを志して旅順工科大学に進学し、予科を経て本科機械科に進んだ。たまたま同県人であったことから二人は知り合い、父が工大を卒業して大連で南滿州鉄道株式会社、いわゆる満鉄に勤め始めた昭和五（一九三〇）年に結婚し、昭和七年に長女である私が生まれた。両親は当時大連に住んでいたが、母は実家に帰り旅順病院で私を出産した。その後、両親は女の子二人と男の子二人に恵まれ、終戦直前には五人の兄弟となっていた。

二 本溪湖と新京（長春）

父は大連から、本溪湖工業実習所の教官として赴任し、一家は本溪湖に移り住んだ。本溪湖は、奉天（現瀋陽）の南東約六十キロメートルにある中国東北部でも有数の鉄鋼と石炭の産地である。街の中には太子河という大きな川が流れ、奉天から安東に通じる安奉線の鉄橋がかかっていた。私の家は太子河のすぐ近くに

あり、目の前にとっても広い川原があったので、よく妹と川原で遊んだ。対岸の丘の中腹には、煤鉄公司の大きな煙突が見えた。

本溪湖に二年ばかり住み、昭和十三年に私は本溪湖小学校に入学して、鉄橋を渡って学校に通ったが、間もなく父が新京工業大学の教師に転勤したため、新京（現長春）へ引越し、桜木小学校に転校した。初めは学校の近くに住んでいたが、後に郊外の南湖という所に引越し、バスで通学するようになった。満州国の国務院のそばを通り、毎日国務院の立派な建物をバスの窓から眺めていたのを覚えている。

新京に移ってじきに弟が生まれたが、新京の冬の余りの寒さに赤ん坊やその上の妹までもが病気をしたので、父が単身赴任の形で新京に残り、母と当時三人の子供たちは、母の実家のある旅順に引越すことになった。私が小学校一年生の三学期のことであった。

三 旅順での生活

私は旅順第一小学校に転校し、それから終戦まで旅順で過ごした。関東州や満州の学校も日本と同じ教科

書で、同じ教育が行われていたのは言うまでもない。

日本人のみの学校であったが、中には希望して入ってくる外国人の子もいた。私のクラスには楊さんという中国人の生徒と、ベローフさんという白系ロシア人の生徒がいた。二人とも日本人と同じように日本語を話し、クラスに溶け込んで何の違和感もなかった。

四年生からは週に一時間、中国語の授業があった。

音楽の時間は、日本の小学唱歌のほかに満州唱歌を歌

ニャンニャン

った。満州には優れた作詞家、作曲家がいて「娘々

祭」「たかあしをどり」「南満本線」「こな雪」など、満州の風物を描いた良い歌が多かった。

私の一家は、初めは学校のすぐそばの市営住宅に住んだが、祖父母が老齢のため健康がすぐれなくなつたので、四年生のときに祖父母の家「齋藤商店」に引越した。

齋藤の店は間口がとても広く、店の上には横書きで大きく「陸海軍・諸官衙御用達 齋藤商店」と書いてあった。米、雑穀をはじめ食料品一般を扱っていて、

店は繁盛していた。陸海軍に納める食糧もとても多かった。海軍の各艦艇が旅順港に入港すると、主計の士官たちが店に見えた。中には、店で遊んでいた私たち姉妹にトランプのツー・テン・ジャックを教えてくれたり、神経衰弱やババ抜きで一緒に遊んでくれたりしたものだった。後に日本海軍が壊滅した中で、あのやさしい士官さんたちはどうなっただろうと考えることがある。

四 大東亜戦争

昭和十六年十二月八日、日本は米英に宣戦を布告し、大東亜戦争に突入。すぐさま真珠湾での赫々たる戦果が報じられ、緒戦は連戦連勝、破竹の勢いであったが、商人の勘でもいうのか、祖父が、「あの物量を誇るアメリカと戦うのは無謀だ」と言っていたのが耳に残っている。その翌年、私が五年生のときに、祖父と祖母が相次いで病死した。終戦後、今まで築いたものすべてを捨てて引き揚げて来たことを考えると、一番良い死にどきだったのかもしれないと私は思っている。

母は一人娘だったので、生まれたばかりの我が家の

次男が斎藤家を継ぎ、実質上は母が店を切り回した。中国人の古くからの番頭たちもいたので商売に支障はなかったが、戦争が深まるにつれ戦況の悪化は明らかで、米が内地から届かなくなり、軍への物資納入には大変な苦勞があった。

昭和十九年に、私は小学校を卒業し旅順高等女学校に進んだが、もうそのころは授業がほとんどなく、毎日が勤労働員だった。一番多かったのは、当時旅順に造営された別格官幣大社関東神宮の境内の松の木の毛虫取りで、水の入った空き缶を片手に、割り箸で毛虫を取って缶に入れるのである。また旅順運動場を開墾して畑にするというので、モッコをかついで人通りの多い道路で肥料のための馬糞拾いをしたこともある。だから、旅順高女については良い思い出は全くない。ただ当時の先生や友だちたちとのつながりだけを大切に思っている。

昭和二十年五月ドイツが無条件降伏し、ソ連参戦も間近と言われるようになったが、関東軍は南方に兵員を割いて非常に弱体化していた。六月、在満の日本

人成人男子が根こそぎ召集された。四十歳を超えた近所のおじさんたちも、学校の先生方も皆出征したが、高年齢で訓練も未熟なこの人たちが還ってくることはほとんどなかった。

五 ソ連軍の進駐

昭和二十年八月九日にソ連が参戦し、十日関東州全域に戒厳令がしかれた。八月十五日には、家に帰ると大人たちがラジオを囲んで、日本は負けたのだと沈鬱な顔をしていた。

二十二日、旅順占領軍司令官となったソ連のイワノフ中将が飛行機で到着、旅順戒厳司令官小林海軍中將との間で降伏文書の調印が行われ、旅順の街のどこからも見える白玉山の表忠塔に大きな赤旗が翻った。

二十九日、巨大な戦車を連ねたパレードが目抜き通りを行進した。行進を見に行った男の子たちは、兵士たちの服装のみすぼらしさと、女の兵士や将校がいることに驚いたと言っていた。ソ連太平洋艦隊も旅順港に入港し「ウラー、ウラー」の声が港中に響いた。

そして、終戦から一週間近く経って父が奉天（現瀋

陽)から帰つて来た。父は三十九歳であつたが、満州重工業航空機工場の責任者であつたため召集はなく、ソ連進攻とともに中国人の工員たちに助けられ、中国人の服装で汽車に乗り、あちこちで乗り継いでやつと旅順まで辿り着いたのだ。我が家では全員非常に喜んだし、助かりました。もしあのとき父が帰つて来なかつたら、幼い子供たちは残留孤児になつていたかもしれない。

終戦後、我が家には寄宿舎を追われた旅順医専の学生さん数人が寄宿された。毎晩のように、ソ連兵の銃声が街に響くような物騒なときだったので、ありがたかつた。

ある日、少年のような若いソ連の兵士が店に入つて来て「ワタ、ワタ」と言った。店員が「綿が欲しいらしいよ」と言うので脱脂綿を持って行くと、水を飲むまねをするので水を渡したら、コップいっぱい飲んで帰った。私は、ロシア語で水はワタなんだと一つ覚えだ。後でロシア語をちよつと勉強してから、「ワダー」だということがわかつた。

またある日、ソ連の将校がやつて来て、家にあるピアノを見つけた。蓋を開けて懐かしそうになでまわしていたが、とても上手に弾き始めた。目に涙さえ浮かんでいるように見えた。その後、そのピアノはソ連軍に持つて行かれてしまつたが、引き換えにお米一袋が届けられた。

間もなく齋藤商店はソ連軍に接収されて、一家は懇意な仲野歯科医院に同居させてもらうことになつた。歯科医院にはソ連兵がよく入つて来たので、女性たちはその都度、押し入れの天井にある穴から天井裏に隠れた。

六 旅順からの強制退去

十月初め、日本人は全員旅順を退去せよとのソ連軍の命令が出された。旅順はいつも軍の意向に左右される街なのだ。住み慣れた家と別れ、馬車を連ねて親戚や知人を頼つて大連に向かう。

我が家の引越しには、中国人の元店員が骨を折つてトラックを一台用意してくれたので、積めるだけの荷物を積み込んで出発した。街には、双十節の飾りが

あちこちに見られるころだった。道のりの半分以上走ったろうか、トラックが突然エンコしてしまった。運転手さんが直そうとするがなかなか直らない。そのうち中国人がたくさん出て来て、トラックの周りをぐるぐると取り囲んだ。やはり、言葉の通じない人たちに取り囲まれるというのは不気味なものなのだ。そのとき、小銃を持ったソ連兵が二人来て大連までトラックに乗せてほしいと言い、乗り込んで来た。間もなくトラックも直り、同乗のソ連兵も共に出発したが、ほっとしたことは否めない。母は、後々まであんなに怖いことはなかったと言っていた。ソ連兵は大連駅の近くで降り、私たち一家は大和町という所にある親戚の家に居候することになった。鏡ヶ池が目の前にある、元の郵政官舎であった。

七 大連での立ち売り生活

日本の企業や役所は閉鎖され、働き口のない日本人にとつては、衣類や家財道具を売り食いするしか生きるすべはなかった。街の広場に出て「ハラショー ハラショー」と言いながら立ち売りをする。しまいには

「ハラショーに行く」という言葉までできた。不要な鍋、釜、やかんまで売った。

旅順高等女学校には寄宿舎が併設されていて、満州の各地から寄宿舎生が来ていた。終戦後の情勢の悪化から、満州の奥地や山東半島から来ていて親元に帰れなくなった生徒たちがいた。ソ連軍が旅順に入って来たときには、舎監の先生たちがその生徒たちの頭を丸坊主に刈り、一緒に避難した。そして共に大連に行き、引揚げまでの間共に過ごして、先生も生徒も大変な苦労をされた。内地に帰って、やっと親とめぐり会えた生徒も何人かいたし、不幸にして親に会えぬまま大連で病死した生徒もいた。舎監の先生との生活では、先生たちが日本の着物を買ってドレスに仕立て、生徒がそれを「プラーチエ プロダユー（ドレス売ります）」と売り歩いたが、着物で仕立てたドレスはソ連兵が喜んで買い、とてもよく売れたと回想している級友もある。

私の父は大連ドックに就職できて、子供たちは学校には行けたが、当時のインフレはすさまじく、父一人

の給料で一家七人を養うのは困難で、私も学校から帰ると道端に日本人の大人や子供たちと並んで台を置き、南京豆や母がサツマイモで作ったお菓子などを売った。通貨は、ソ連軍が発行した赤や青や緑の軍票だった。

私が気に入っていたのは、通り過ぎるソ連の兵士たちの合唱だ。宿舎と勤務先の行き帰りには列を作って行進していたが、一人が歌を歌い出すとすぐ三部、四部の合唱になっていく。低音がよく響いて、素晴らしいハーモニーだった。当時、兵士たちが一番よく歌ったのは「カチューシャ」で、日本の少年少女たちもすぐに覚えてしまった。カチューシャという歌の上手な女性を歌った明るい旋律は、それまで日本の兵隊さんたちの怒鳴るような、勇ましいばかりの軍歌を聞いていた身にとって、嬉しい驚きだった。

八 大連の学校

大連の学校では、小学校も中等学校も普通に授業があったが、音楽や演劇などが活発になった。合唱部が歌う「美しく青きドナウ」などは、戦時中音楽に飢えていた心にしみ入るようだった。そして共産主義の思

想教育も行われるようになった。ロシア語の授業もあり、立ち売りに大いに活用させてもらった。昭和二十一年には旧制中学が日僑男子中等学校、高等女学校が日僑女子中等学校と改称された。

そして昭和二十一年の十月、いよいよ引揚げが始まるのが決まり、学校は繰上修了証明書を発行して閉鎖した。仲良し同士で、お互いの内地での連絡先を教え合ったりして別れた。最後に、クラスのみんなで「故郷を離るる歌」を歌ったのが忘れられない。

九 ソ連の漁網工場

学校が閉鎖され、引揚げの順番がいつ回ってくるかわからないので、私はソ連軍経営の漁網工場に働きに行った。日本人の少年少女がたくさん働いていた。閑東軍の倉庫を改造した広い工場の中で、莫座の上に一列に並んで座って、竹針と竹篋を使って漁網を一目一目編んでいくのである。私たちのような編み手のほかに、もう少し年少の掛け子という竹針に糸を巻きつける係、またもう少し年長の座繰りという糸を機械で撚る係などがあった。

待ちに待った給料日、初めてもらったお金を大切にズツクの袋に入れ、ちよつとトイレに行つて帰つて来たら、靴の中からお金が消えていた。私は本当にがっかりして家に帰つた。

その冬は殊のほか寒い冬だったが、毎年シモヤケに悩まされる私の指が腫れてくることはなかつた。毎日指を動かしていたせいだろうか。そして、私の編んだ漁網は北洋で魚を捕まえたであろうか。

十 引揚船で

終戦時満州と関東州にいた邦人百五十五万人余りを、どのように内地に送還するかについて米、中、ソが協議した結果、満州にいた約四十万人は葫蘆島から、大連地区は大連港から帰すことになり、まず葫蘆島引揚げが昭和二十一年五月から始まり、大連港からは十二月三日に第一次の船が出航した。

昭和二十二年三月、いよいよ引揚げの順番が回つてきた。職域や地域で梯団が組まれたが、我が家は父が勤めていた大連ドツクの梯団だった。八日に手に持てる限りの荷物を持って集結所に集まり、ソ連将校の面

接があり、収容所に入つて三、四日船が入るのを待つた。技術者はソ連が強制的に残留させるといふ情報があつたので、父は集結所に集まつてから出航するまで目立たないようにしていた。船が大連港の岸壁を離れたときには、私たちも本当にほつとした。

後に私が内地の学校に転入してから、引揚船の経験を国語の時間に作文に書き、大変褒められて学校の文芸誌に掲載されたので、今でも残っている。ちよつと気負い過ぎていたのが気になるが、当時どんなに内地での生活に希望を抱いていたかわかるので、当時の字遣いもそのまま、掲載してみよう。

『 故国へ向かつて

朝霧の中に鴉の鳴く聲がしきりに聞こえる。まだ明けきらぬ水面にはゆるやかに波がうねり、船腹を打つ音が快い。三月とはいえ、寒気はオーバーの上からひしひしとせまって特別寒かつた今年の冬の餘波を残している。海上に面した右舷から岸壁の左舷の方へ行く。刻々と明るくなる山々の峯を背景に思い出の街、大連

は静かに眠っている。混沌とした中にも、近代都市の美はここかしこに表れている。八日集結命令が出てから、あまりの慌ただしさにただ嬉しいと思う丈であったが、乗船して一時の落付きと、この朝の景色を見ると、何とも言えない感慨が湧いてくる。終戦以来、日本人の生活の苦しさ、惨めさ、けれどもすべての人の心を支配しているものは、早く我々の国日本へ帰りたいたいという激しい希望で、その希望故に生き長らえた人も少なくはない。何回も何回も引揚げが始まるというデマに狂喜しては、後で深い落胆に陥らされた。けれど、その夢寐にも忘れられなかった引揚げが今実現されつつあるのだと思うと、嬉しいと同時に、もしこの幸福がフツと消えてしまったらどうしようという不安に襲われる。

夜は明け放たれた。八時出帆の予定が、少し遅れたらしい。船員さんが忙しそうに働いている。やがて、錨がガラガラと巻き上げられる。汽笛をこの埠頭の空へ高く響かせて、船は静かに動き始める。人々は甲板へ上って街の方を眺めている。「さようなら」苦しかっ

た中にも思い出の街よ、旅順を追われてから始めて貧しきというものを味わわせてくれた教訓の街よ、この教訓は終生忘れることのできない人生の道標となる。

岸壁にはソ連の将校や兵士が見送っていた。「ドスビダーニヤ、ドスビダーニヤ（さようなら、さようなら）」と手を振って別れる。だんだん速力を増して港外へ出る。澤山の鴉が後になり先になりしてついでくる。市街はだんだんと遠ざかり、裸山を後に一きわ高い遼東ホテルの紅い屋根が、くつきりと聳えていた。

朝食が配られるまで船艙へ下りる。貨物船が引揚げに使われてか、甲板下の暗い船艙に皆入っている。上下二段に別れていて、座っていないと頭がつかえる。たくさん詰め込まれたが、だれも不平を言わない、内地へ帰れるのだから。

用のないときは、いつも甲板へ出る。朝のうちにはチラホラと鳥影も見えたが、やがて見渡す限り波・波・波の大海原に出る。船首へ上る。緑色の波、そのうちの陰は紫色に紺青に彩られて、海洋の美はその深さのように味わえば味わうほど盡きないであろう。とき

どき白く砕けて散る波頭のしぶきの中には、虹の七色を見ることが出来る。舳先は東へ東へと波を切つて進む。この底知れぬ海を見つめているうちに、言い知れぬ大きな希望が湧いてくる。憧れの内地、勉強も十分のできる内地に帰つたら、一生懸命勉強しよう。努力によつて何事も押し進めて行こう。民主日本の再建に微力を尽くし、また人類のためにも何か立派な貢献をしたい。この広い海原から受けた感じ、私はこれを決して忘れてはならないのだ。これを思い出す毎に失意のとき、目標を失つたときに、一縷の望みを得られるに違いない。

海上の一日は長いようで短い。太陽はだんだん水平線に向かつて落ちかかってくる。やがて夕食。船艙へ降りる。階段が急なので、大人の方がおつゆを持ったまま転げ落ちて、頭からおつゆをあびてしまった。お気の毒だったけれど、とうとう吹き出してしまった。夕食後外へ出ると、日は没し果ててかすかに残曠が残っているばかり。暗い海面に波の音は今日の穏やかな航海を祝福しているようだった。船橋にカッと大き

な電燈がつく。高い船橋にいるアメリカの将校が見えた。そして、暮れ果てた海上を一隻の船が、安らかに眠る三千余人の人々を乗せて黙々と日本へ日本へと進む。

四年 名倉弘子』

引揚船の中では嫌なことがあつた。吊し上げといつて、大連労働組合等で威張つていたような人を甲板に引きずり出し、みんなで取り囲んで口々に糾弾するのだ。今まで何も言えなかつた人たちが居丈高になり、肩で風を切つていた人が土下座して謝る。私は人間性の浅ましさを見せられた思いがした。

楽しいこともあつた。満州に渡つて帰れなくなつていた灰田晴彦・勝彦の楽団が乗り合わせていて、最後の一夕演奏会が開かれ、「鈴懸の径」「デンデンムシムシカタツムリ」などの歌や演奏をたくさん聞かせてくれた。生のプロの楽団に接する機会などなかったので、乗客全員大いに楽しませてもらつた。

そして船出して四日後、玄海灘の荒波に船酔いした

後、博多湾に入った。甲板にずらりと並んで祖国の緑濃い山々を眺めながら、このときばかりは皆幸せそうな顔をしていた。

十一 父のふるさと

内地に上陸して、頭からDDTをかけられて真っ白になったのは、引揚者共通の経験だろう。人によっては特別の検診とかあるいは現地情勢の詳細な聞き取りなどもあったようだが、四、五日後にはそれぞれの故郷に向かう列車に乗り込んだ。南に向かう九州地方の人、関門海峡を抜けて東へ向かう人、ここから全国に

散って行った。博多発の列車は、初めはゆっくり座れたが、途中の駅でだんだん混んできて通路もデッキも超満員、窓から乗降する人もいて大混乱だった。そして広島はもちろんのこと、沿線の大都市は戦争の傷跡をまだ深く残し、日本の復興は未だしと思われた。

私たち家族は東京まで行く列車を豊橋で降り、浜名湖の北岸を通る二俣線という支線に乗り換えた。その沿線には、江戸時代東海道の脇往還の一つである姫街道が通っていて、女人は楽なそちらの道を選んで旅を

したと言われている。列車は愛知県から静岡県に入り、私たちは西気賀という田舎の小さな駅で降りたが、父は列車の中で会った知人に自分の父親が前年に死んだことを知らされて、浜名湖の湖岸で湖面を見詰めたまま動かなくなってしまった。実の父にもう会えない悲しみも大きかったが、今は兄の一家が住んでいる実家に妻と子ども五人を連れて転がり込む身としては、やはり父親がいるといえないとは、気持ちの上で大きな違いがあったのだろう。

当時の地名で言えば静岡県引佐郡気賀町下気賀、ここが父の故郷であった。浜名湖の東北岸に位置している。父は小学校を出ると、静岡県西部の大都市、浜松の一中に入り、まるでトロッコ列車のような小型の鉄道、いわゆる軽便鉄道で毎日通った。今は廃線となったが、軽便は気賀を通り三方原を通り浜松まで通じていた。三方原はその昔、浜松の城主だった徳川家康が、甲州から京都に上ろうとしていた武田信玄の大軍を迎え撃ち、大敗北を喫して命からがら浜松城に逃げ帰ったという古戦場で、逃げる途中で老婆の売っていた小

豆餅をとって食べ、追いかけてられて銭を払わされたという言い伝えがあり、「小豆餅」「銭取」という風変わりな駅名があった。

工業都市浜松は、戦争中艦砲射撃でひどくやられたということだが、青々とした畑の広がるこのあたりは表面的には戦争の傷跡は見られなかった。畠に面した名倉の家の二階を空けてもらって、ひとまず落ち着いた。家の裏手には二俣線が通り、線路の向こう側には小高い丘があつて畑になっていた。どこを見ても緑々で、禿山だらけの満州と違って柔和な風景であつた。

新学期が始まるので、私はとりあえず気賀町にある気賀高女の四年に転入の手続きをとり、田んぼの畦道や、めつたに列車の通らない二俣線の線路の上を通つて、のんびり通学した。

十二 浜松への転居

間もなく、浜松市で就職活動をしていた父の就職先が決まった。九州の小倉に本社があつた小倉製鋼所の浜松工場である。後に住友金属に吸収されて住倉工業となつた。父はしばらく軽便鉄道で通つていたが、新

しくできた浜松市の市営住宅に入れることになり、早速転居することになった。伯父の家では皆親切にくれたが、やはり今まで自分たちの生活していたスペースを割いてくれたわけだし、台所は共用、今まで使つたことのない竈で煮炊きするとあつては勝手が分かつた、こちらが肩身の狭い思いをし遠慮をするのも、人間の心理としてまた当然のことであつた。市営住宅は二軒一棟の粗末な木造ではあつたが、やはりほつとしたことは否めない。そろそろ一学期が終わろうとするころであつたと思う。

浜松の女学校としては有名だつた市立高女、通称イチリツに転入の手続きをとつた。転入に際しては、試験を受けさせられた。職員室の片隅で、国語や数学の答案を書いたのを覚えている。そして四年に編入することができた。

大連では三年生の二学期の半ばから三学期まで、引揚げのため授業はなかつたので、やはり学力の差は感じざるを得なかつた。国語や社会ではあまり困つたことはなかつたが、数学では三角函数とか二次方程式と

か、微分や積分まで入ってくるので、わからないことが多かった。父に教えてもらったり、友だちの家に行って一緒に勉強して教えてもらったりして、成績の上では徐々にその差は埋まっていったように思うが、今でも数学アレルギーがあつて、あまり好きにはなれないのは残念なことである。

英語は、戦時中は敵性語ということで女学校に入ってから全然授業はなかった。しかし、終戦後母がこれからは英語をやっておかなければだめだと言つて、自分の女学校時代の英語の教科書を持ち出して、*Miss a Pen* から自分に分かることは教えてくれた。また大連でも、乏しい家計の中から週一回英語を習いに行かせてくれたので、格別に不自由は感じなかったが、ロシア軍進駐後は学校でロシア語を習つたし、ロシア兵にはロシア語で話していたので、「イエス」と言うところを思わず「ダー、ダー」と言つてしまつたり、「ノー」と言うところを「ニエツト」と叫んでしまつたり、「ハラシヨ」や「スパシーボ（ありがとう）」が出てしまつたり、おかしなことは何度もあつた。

昭和二十三年には学制改革があつて六・三・三・四の新学制が施行され、旧制の中学と高等女学校は新制高校となり、女学校五年生だった私は高校二年生となつた。

十三 引揚援護活動

昭和二十三年ごろ、別のクラスの生徒から「海外から引き揚げた生徒で引揚援護のための学生同盟を作つて引揚者の援護をしているんだけど、あなたも手伝わない？」と声をかけられた。当時浜松の高校にも、台湾や朝鮮や満州から引き揚げた生徒がたくさんいた。遠州地方は方言の強い所であつたが、引揚者は大体標準語を使うので、どの生徒が引揚者かということはずとわかつたのである。私はすぐに「手伝つてもいいわよ」と答えた。

当時国鉄浜松駅の構内にあつた小屋が学生同盟員の集合場所、休息場所になつていた。行つてみると、隣の男子校浜松北高の生徒とイチリツの女子生徒が多かつた。学生同盟は全国的な組織で、そもそもは海外に父や母や家族が残つていた学生たちが、その救出のた

めに作った組織だということであり、各地の同盟は大学生が主体であったが、浜松の同盟には大学生はおらず、委員長も役員もすべて高校生で、全国でも特異な存在であった。

引揚列車が何時に浜松駅に到着するという連絡が予めあるので、同盟員はプラットホームで列車の人々に湯茶の接待をし、下車した人があればその世話をする。引揚列車の通過はほとんど深夜であった。また、前夜名古屋まで行って、引揚列車に浜松まで添乗して、お弁当を配ったりお茶をついだりした。夜通し添乗をして、未明に家に帰り、少し休んで眠い目をこすりながら学校に行つて勉強する、こんなことを何度もやった。当時は、朝鮮、台湾、中国からの引揚げは終わり、シベリアからの引揚げが最盛期を迎えていた。ソ連のナホトカ港を出航した船が舞鶴に入り、そこから全国各地に帰還して行った。シベリア抑留者は戦後旧満州にいた関東軍が主体であったが、学生で動員された者、満州地区の警察官や官吏もシベリアに連れて行かれたし、千島列島から連れて行かれた兵士もいた。

シベリア抑留者にはソ連側が短期間に相当強力な共產主義教育をしたとみえて、帰還者の中には、すぐにも日本革命のために邁進しそうな勢いの人が多く、列車の中でも意気軒昂であった。中には、添乗してサービスしている私たちにまで「君たちは日本帝国主義に踊らされている」というようなことを言うので、私が口をとがらせて反論したことも覚えている。あの勇ましい人たちは、その後日本の社会の中でどのような人生を送られたのだろうか。

十四 高校卒業と進路

そんな生活を送っているうちに、昭和二十五年、高校卒業の年が明けた。私は大学に行つて歴史を勉強し、研究者になりたいという夢を持っていたので、大学進学を心から望んでいたが、家の経済状態を考えると、とも言い出せず、悩み多いときを過ごしていた。

そんなある日、母が新聞を持って来て言った。「この新聞に衆議院速記者養成所の募集広告が載っているわよ。授業料は無料だし、給費制度もあると書いてある。これからは女も手に職を持たなければいけないと思う

から、受けてみたら」と。母は速記というものを昔からよく知っていた。私が小学校三年生のころ、地元の大連日日新聞主催で海軍の士官たちと旅順の小学生との座談会があった。私は最年少の代表として出席したが、部屋の隅でみんなのしゃべっているのを筆記している人がとても気になった。みんなもう少しゆっくり話してあげればいいのにと思ったが、その人は悠々と鉛筆を走らせていた。帰って母にそのことを話すと、

「それは速記というもので、字じゃなくて符号で書くのだから、いくら早くしゃべってもちゃんと書けるのよ」と教えてくれた。しばらくして、その座談会が小学生新聞に連載されたが、なるほどちゃんと書いてあった。

私は、人のしゃべるのを書く速記というものにあまり魅力を感じなかったので、いつまでもぐずぐずしていたら、ある日担任の先生に呼ばれて早く決めなさいと叱られた。先生も書類を作るのに困っておられたのだろう。憧れの東京に出られるというのは一つの魅力だったし、受けてみようかと思いき直して願書を提出し

た。送られてきた受験票は、五十人募集のところ二十番台だったので、これはだめだと、かえって気が楽になった。

後になって、ほかの弟妹たちはすべて大学へ行ったので、母はよく「当時の状態ではどうしようもなかったのよ。済まなかったね」と言った。もちろん苦学すれば大学へも行けただろうし、すべて自分の選択で、だれのせいでもない。

十五 衆議院内での試験

入所試験の前日、私は東海道線の列車に乗った。当時は浜松から東京まで五時間以上かかった。後楽園球場のそばの弓町という所にある親戚の家に厄介になり、翌日地図を見ながら都電で衆議院の受付に行った。試験場は衆議院の中のいろいろな部屋が使われていた。当時は就職難で、時期も大学の入試がひと通り終わるところだったので、ぼっと出の小さい女子高生から見ると「おじさん」とも思われるような浪人生が押しかけ、また洗練された都会のお嬢さんもいて、ただただ圧倒されるばかりであった。

試験科目は国語、英語、社会と適性試験で、国語はまあまあできたと思うが、英語はそう得意でもないし、社会の問題で「九分割案を説明せよ」というのがあり、当時問題だった電力九分割のことであつたが、勘違いして間違えてしまった。ただ適性試験は「国会は国権の最高機関である」という言葉が速記符号で書いてあつて、それを間違えないように時間内に書けるだけ書けつというものだったが、私はスピードを上げてたくさん書いた。

第一次試験の合格発表の日、私はとてもダメだと諦めていたので、浜松に帰る支度をし別れを告げて親戚の家を出たが、念のため恐る恐る電話で問い合わせしてみると、第一次は合格しているということだったので、慌てて翌日の面接の手続きをとり、その夜は東京駅の待合室で浮浪者のように夜を明かした。そして不思議なことに面接試験も合格し、正式に衆議院速記者養成所の生徒に採用されたのである。

十六 速記者養成所から衆議院記録部へ
衆議院速記者養成所は、当時は千代田区三年町にあ

つた。国会議事堂から特許庁の方に下りて行く坂の左側、総理府の崖の下で、運動場やテニスコートもあつた。後に用賀に移転して、当時の跡地には広い道路が走っている。入所式が始まって驚いた。私たち三十四期生五十人の中に、女生徒は五人しかいなかったのだ。そして入所式が終わつてまた驚いた。担任の先生が「とにかく速記に集中しなさい。恋愛は絶対にいけません」と仰せられたのだ。

一つの高度な技術を、短期間に叩き込むというのは大変なことである。二年半の養成期間中に、全くの素人から十分間に三六〇〇字以上という高速の演説が書けるまでに熟達させる。それには、毎日毎日の練習と頻繁なテストが欠かせない。そして、テストの成績によつて毎月座る席順から下駄箱の順番まで変わるといふスバルぶりだった。速記のほかに英語、フランス語、経済、法律などの授業もあつた。

すぐに十人ほどが辞めてしまった。残つた約四十人、うち女子四人はみんな団結して頑張つた。当時は録音機も全く普及していなかつたし、ラジオも買えなかつ

たので、放課後みんなで交代しながら朗読して練習するしかなかった。いつも遅くまで朗読の音が聞こえていた。そしてだんだんスピードが上がっていくと、それに追いつけなくて辞めさせられるケースもあった。頭の良し悪しとは別に速記には適性というものがあるので、早く転換した方がその人のためだということもあるのだ。事実、その後警官や税務署員に転進して成功した人もいる。また二年生の半ばにもなると普通のスピードの話は書けるようになり、外からの求人もあって就職していく人もいた。当時男性は新聞社の求人が多く、同期生は朝日、毎日、読売、日経、産経といった大新聞すべてに行っている。

養成期間の二年半が終わる九月の終わりに、衆議院の採用試験が院内であり、八名、うち女子二名が合格し、昭和二十七年十月一日付で衆議院記録部に配属され、私の長い公務員生活が始まった。

たまたまその日は第二十五回衆議院選挙の投票日でもあり、私は初めて選挙権を行使し、急に大人になったような気がして意気揚々と出勤したものである。十

月二十四日には第十五特別国会が召集され、議長に大野伴睦氏、副議長に岩本信行氏が選出された。十月三十日には首班指名選挙が行われ、自由党の吉田茂氏が選出、直ちに第四次吉田内閣が組閣された。そして、私も初めてまばゆい照明の中、本会議の速記席で速記をとったのである。

十七 日中友好交流の活動

それから四十年、私は国会職員として政治の流れをごく身近で見詰めてきた。その間にはさまざま大きな出来事があった。昭和三十五年の、日米安保条約改定時における与野党の激突と国会内外を揺るがしたデモ、沖繩返還協定、あるいはロッキード事件、リクルート事件等々。そして、私の在職中の内閣は吉田内閣から宮澤内閣まで十六代を数える。

その中で私が一番嬉しかったことといえば、やはり日中両国の間で激動の時代を過ごした者として、昭和四十七年の日中共同声明であった。訪中した田中角栄総理と周恩来総理が交わした握手には感動した。また昭和五十三年、福田内閣のときに日中平和友好条約が

締結され、日中関係は確固たるものになった。平成二十(二〇〇八)年の今年は三十周年の節目である。

私は平成四年に衆議院を定年退職したが、そのころ昔の旅順の学校の先輩たちが結成した「旅順児童教育後援会」、現在はNPO法人の認証を受けて「日中児童の友好交流後援会」となっているが、ここでボランティアとして、ささやかながら日中の友好交流のために仕事をしている。主な活動としては、第一に、日本の小学生と中国の小学生の間の年二往復の手紙の仲介、翻訳等の援助である。手紙の中では、お互いの家庭の様子とか学校生活などが生き生きと語られる。そして第二には、中国児童の日本訪問旅行の支援である。毎年一回四人ないし五人の中国の児童が来日し、日本の友好校を訪問して交流、また日本の家庭へホームステイをさせて、日本をよく知ってもらっている。日本からも訪中して相互交流になることを望んでいるが、今のところ日本の小学生が訪中するのはなかなか難しい。これらの私たちの活動は、ささやかで地味なものではあるけれども、将来のより大きな日中の人々の友情、

ひいてはアジアの人々の友情、そして世界の人々の友情となって花開いていくことを、心から願っている。